

福井県産タナゴ属魚類について

武生高等学校 五十嵐 清

タナゴ属魚類にはタナゴ、ヤリタナゴ、タビラ、アブラボテ、イチモンジタナゴ、カネヒラ、イタセンバラの7種が知られている。本県ではそのうちヤリタナゴ、タビラ、アブラボテ、イチモンジタナゴの4種のみられる。これらの魚はいずれも小ブナに似ていることから、タブナ（北潟）とも呼ばれ、体色がやや赤味がかってひ弱く見えることからチャナ、またはチャナツベ（武生）などと子供に愛称されて、フナと区別されている。苦味が強く、フナのような食用魚としての価値はない。筆者は本県産タナゴ属魚類の検索表を次のように作ってみた。

A 体側の縦帯は不鮮明か、または欠き、口ひげが長い。

B 口ひげは吻長より長く、体側の縦帯は不鮮明で背鰭外縁がほぼ直線をなす……

……ヤリタナゴ *Acheilognathus lanceotata* (TEMMINCK et SHLEGEL)

BB 口ひげはほぼ眼径に等しく、体側の縦帯を欠き、背鰭外縁は外に彎曲している……

……アブラボテ *Acheilognathus limbata* (TEMMINCK et SHLEGEL)

AA 体側の縦帯は鮮明で、口ひげが短い。

C 肩部の黒色点と体側縦帯とは離れている……

……タビラ *Acheilognathus tabira* JORDAN et THOMPSON.

CC 肩部の黒色点と体側縦帯とは接続し、前端は彎曲している……

……イチモンジタナゴ *Acheilognathus Cyanostigma* JORDAN et FOWLER.
ER.

タナゴ属にみられる顕著な特徴は体長はいずれも5~7cmで、体が側偏して体色が美しいことである。特に産卵期に近づく、第二次性徴である婚姻色 (Nuptial Coloration) が鮮明で、鱗の表層には黒色細胞、赤色細胞、黄色細胞、白色細胞の順序に層をなして現われ、熱帯魚を思わせるようで美しい。フナとは違っていて、産卵習性が特異である。淡水産のカラスガイ、ドブガイなどの二枚貝の殻の中に輸卵管を挿入して、その鰓葉に産卵し貝の中で孵化生長させるといった賢明な方法をとっている(面白い)。流れの急な川にはほとんど生息できないが、細流や湖沼の静かな浅いところを好む。フナのような適応能力がなく、水から上げるとまもなく参ってしまう。本県におけるこれらの魚類の性態などについて知り得たことを次に述べてみたい。

ヤリタナゴ *Acheilognathus lanceolata* (TEMMINCK et SHLEGEL)

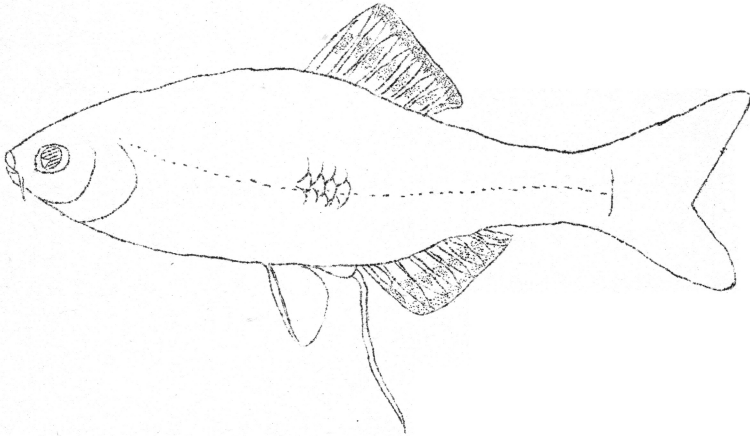


Fig. 1 ヤリタナゴ(♀) 1965.8.1 勝山市にて採集
体長66mm, 体高20mm

最も普通に中下流域の細流に見られ、特に灌用水路などによく見られる。細流で採集されるものは5~7cm程度のものであるが、北潟、三方湖で採集されるヤリタナゴは8~9cmの大きいものが多い。体側には不鮮明な縦帯が認められ、背鰭の軟条間に紡錘形の黒色斑紋が見られる。産卵期の雄は体色がやや黒ずむが、鮮明な婚姻色を現わすことでよく知られている。雌は雄程目たないが、臀鰭の前方に長い産卵管を垂らしているので一見して区別がつく。

タテボン、マツカサガイの葉内に産卵するといわれ、産卵期は5~7月ごろである。

アブラボテ *Acheilognathus limbata* (TEMMINCK et SCHLEGEL)

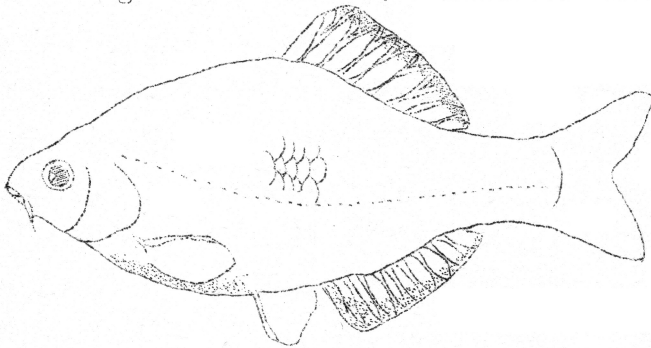


Fig. 2 アブラボテ 1963.7.1 武生市五分市町にて採集
体長57mm, 体高18mm

ヤリタナゴに似ているが、縦帯を欠き背鰭外縁が彎曲している。ヤリタナゴにみられる軟条間の斑紋はなく、背鰭^{背鰭}の外縁や腹面の黒色は雄では特にめだっている。水の清澄な細流を好みイシガイ類の^鰓葉内に産卵するといわれている。産卵期は4～7月におよび、5～6月が最盛期と思われる。本県では武生市五分市町の湧水池と細流で、三方湖に注ぐ細流で採集しているのみで、その分布域も局限されているものと思われる。アブラボテの分布は愛知県西部を東限としてそれより西の本州、四国、九州、朝鮮南部の川に分布していると報告されている。本県での採集は分布上注目し難い。

タビラ *Acheilognathus tabira* JORDAN et THOMPSON.

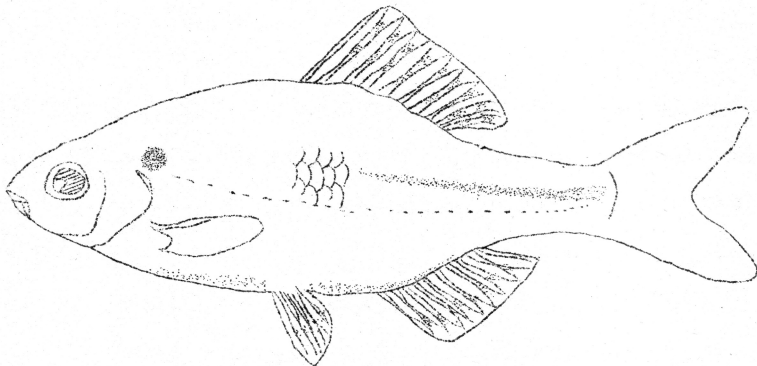


Fig.3 タビラ 1964.6.1 松岡町にて採集

体長68mm, 体高25mm

ヤリタナゴに一見似ているが、肩部に円形の黒色点があり体側縦帯は背鰭^{背鰭}始部から始まって後方におよんでいる。中村()は本種を更に^{背鰭}縁辺が白い、シロヒレタビラ(*A. tabira* JORDAN et THOMPSON.)と縁辺が赤いアカヒレタビラ(*A. tabira* Susp)の二種に区別している。シロヒレタビラは琵琶湖、淀川水系と濃尾平野に分布し、本県にみられるタビラはアカヒレタビラのみでシロヒレタビラは未だ採集されていない。

タガイ、マツカサガイなどの^鰓葉内に産卵するといわれている。産卵期は4～7月で水の割合いに澄んだ細流に好んで生息している。わが国のアカヒレタビラは関東と東北、中部地方の日本海側に分布しているといわれ、本県のアカヒレタビラはその南限に当たることになる。

イチモンジタナゴ *Acheilognathus Cyanostigma* JORDAN et FOWLER.

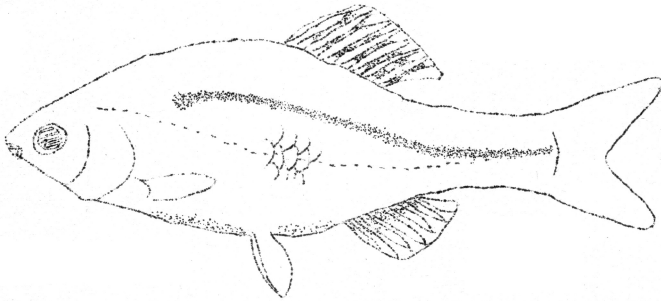


Fig.4 イチモンジタナゴ 1965.9.20 三方湖(鳥浜)にて採集
体長65mm, 体高19mm

体長がやや細長いことでタナゴに一見似ているが肩部の黒点とそれに直結した体側の緑色の縦帯は鮮明でその前端はやや下方に太く曲っている。特にホルマリン固定の標本では縦帯はいっそうははっきりして一文字をくっきりと浮彫りしている。流れのゆるやかな細流や湖ではヒンなどの水生植物の繁茂した浅い(1m)湖周辺に好んで生息している。タガイ、ドブガイなどの鯿葉内に産卵するといわれ、産卵期は4~6月ごろと思われる。イチモンジタナゴの分布は濃美平野を流れる各水系と琵琶湖、淀川水系にのみ分布していると報告されている。本県では三方湖だけで外の水系では全く採集されていない。アブラボテの分布とともにイチモンジタナゴの本県における分布は注目すべきであろう。三方湖のヤリタナゴは湖周辺にかなり広範囲に分布しているがイチモンジタナゴは湖の北東部の一角に限られて生息するものと思われる。

タナゴ属魚類は食用魚としての価値がほとんど認められず雑魚として取扱われている。熱帯魚のように美しい体色は観賞魚として、また水棲小動物の捕食からコイ、フナとともに天敵としての価値をもう一度見直されてよい魚のように思われる。私たちの小供のころ、小川に右往左往するタナゴの群やメダカの群が最近めっきり少なくなったことは毒性の強い農薬の乱用と相まって、胸の痛み思いがしてならない。